『利益が上がる！NPOの経済学』

跡田直澄 著（慶応義塾大学教授）

集英社インターナショナル
1680円

NPOと営利企業を機能的に使い分けるビジネスモデルを提示

◎評者　山内直人（大阪大学教授）

「利益が上がる」「儲けなくてどうする」といった文字が躍る表紙や帯は、奇をてらっているようにみえるが、読んでみると案外まじめな啓蒙書である。

昨今NPO（非営利組織）の解説本は巷にあふれているが、本書はNPOが行政や企業と対等に競争できるだけの組織力をつけるにはどうすべきか分かりやすく説いた指南書として出色であろう。

本書の主張は単純明快で、NPO＝ボランティアという幻想を捨て、きちんとサービスの対価をとり、スタッフに世間並みの給料を払えるNPOを目指せということに尽きる。

無償奉仕の過大評価こそNPOの組織力強化の最大の障害になっているというのは評者もつとに主張してきた点であり、強力な賛同者の出現に意を強くしたところである。

本書の最大の付加価値は、単に利益を上げよというスローガンを掲げるだけでなく、具体的なNPO経営のヒントが満載されていることだろう。

NPOへのプロジェクトファイナンス、社会的責任投資専門の特定目的会社による資金調達、NPOによるコンサルティングビジネス、地域通貨を使った寄付市場創造など、NPOと営利企業を機能的に使い分けるビジネスモデルは、実現性はともかく、面白いアイデアであることは間違いない。

一方で、理論的根拠が薄い、あるいは説明不足と思われる主張もある。たとえば、NPOの理想的な財源構成として、営業収入、補助金・助成金、寄付がそれぞれ3分の1ずつであるのが望ましいとして、「3分の1ルール」なるものを随所で主張しているが、なぜそのような構成が望ましいのか、どこにも根拠が示されていない。

また、著者は、NPOが営利企業より同じ質のサービスを安価に提供できると主張するが、本当にそうだろうか。経営センスを身に着けたNPOの方が、社会性に目覚めた営利企業より望ましいと考える理由は何か。このあたり、本書の説明は歯切れがいいとはいえない。

本書で紹介されている興味深い事例は、営利と非営利の境目、あるいは企業とNPOの区別が紙一重であるということ、また、NPOはさまざまな社会問題に対応するために利用可能な組織形態の一つにすぎないということを教えてくれる。

目的と手段を取り違え、NPOを育てること自体が社会目標だと錯覚している「NPO至上主義者」は少なからず存在するが、そういう人たちにこそ本書を読んでもらいたい。

時代小説

末國　善己（文芸評論家）

李氏朝鮮の支配階級・両班に虐げられていた朝鮮の民衆は、秀吉の朝鮮出兵を好機と考え自発的に日本へ渡った。だが自らの非を認めない両班は、自国民の引き渡しを徳川幕府に要求する。荒山徹『柳生薔薇剣』は、両班が進める朝鮮人の帰国事業という史実の背後に奇想を織り込んだ迫力の伝奇小説になっている。

朝鮮出身のうねは、隈本藩加藤家に仕える貴月主馬の正室として幸福な日々を送っていたが、幕府が発した帰国命令を受けたことから、朝鮮と決別するため縁切寺として名高い鎌倉東慶寺へ駆け込む。

朝鮮との関係改善を優先する大御所・秀忠は、うねを奪還するため東慶寺へ剣豪を送り出していく。

一方、将軍家光は東慶寺の守護を柳生宗矩に依頼。宗矩は実の娘で嫡男の十兵衛をも凌ぐ剣技を持つ矩香を、男子禁制の東慶寺に潜入させる。

女性を守る東慶寺の軍師となった矩香が、次々と襲い来る忍びや剣豪と繰り広げるアクロバティックな剣戟を軸にして物語が進み、さらに日本を霊的に守護する陰陽師と朝鮮の妖術師の戦いまでが用意されているので、最後まで目が離せない。破天荒な展開を通して、教科書にも載っていない日朝両国が抱える歴史の〈闇〉を浮かび上がらせていくので、常識を覆す新たな発見も多いだろう。

日本と韓国は歴史認識をめぐる争いを続けているが、朝鮮半島の歴史をどれだけの日本人が理解しているだろうか。日本史ではなく複眼的な外交史をベースにするだけでなく、弱者の視点で歴史を描く伝奇小説の特性を活かした本書は、自国の都合を相手に押し付けることの非を明らかにし、対等な国際関係を作るための手掛かりを示してくれるはずだ。

※この欄は「野崎六助のおすすめミステリ」と隔週交代で掲載します。